

<遠隔システムを体験した難聴当事者（IT 技術者）より>

## デジタル社会の情報保障

モバイル端末を使った情報保障について、とある講演会にお邪魔した時に、端末が貸し出しがされていて、実際に使ってみました。

席が後ろの方でしたので、健聴であっても、大いに助かりました。

また、お子様を連れての参加者が、むずがるお子さんの声を気にして会場を出ようとしていたので、勝手に「会場の外でも、講演の内容がわかるのでは」と、端末をまた貸しました。

はじめは怪訝な顔をされていましたが、終わったあとに「子どもが泣いても、気にしないで講演の内容がわかり、とても便利でした」と、言葉をもらいました。

これも一つの情報保障かなと・・・と、情報保障の幅広さを感じたものです。

聴き難い、聴こえない方々は、聴こえない事に慣れすぎていて、きっかりとした情報保障を求める、その「声」を発する方々が少数派になってしまっているように感じます。

情報補償というジャンルの音頭とりを、どこがしっかりとおやりになっているのかがよく見えなくて、それぞれがそれぞれの得意とする、あるいは、アイデアを具現化するグループがあるのですが、社会の仕組みの中に、コストも含めた情報保障の認知度や普及の認証心理が、壁となって組み込まれていかない。

人工内耳を装着しても「健聴者」になれるわけではないので、人工内耳装着者が、社会の中で能力を生かしていくのには、情報保障のあるなしが、その人の人生に大きな差が生じます。

特に経済活動の会社では、コストや面倒さが大きな壁になり、難聴者個人が、もの凄い努力と時間を費やして

会社活動に参加しています。

そのエネルギーを純粋に、会社活動に注ぐ事ができれば、健聴者の何倍もの威力を発揮できると思うほどです。

会議などが連続すると、もうヘトヘトになってしまい、課題など、もうどうでもよくなってしまふことも度々・・・

デジタル社会の発展が、情報保障を大きく飛躍していくかと、大いに期待をしています。